～ 「ものづくり」のまち「広島県府中市」を舞台に

「ものづくり」の将来を担う若者たちを応援するドラマを ～

府中市は、かつて「備後国」の中心として人や物資の流れの中継点・集積点となり、現在まで家内工業から重化学工業へと多彩な産業が発展し、「ものづくりのまち」として栄えてきました。

この府中市では、毎年 2 月に「全日本ＥＶ＆ゼロハンカーレースｉｎ府中」という、全国の工業高校などの学生や社会人が参加して、自作のＥＶカー（電気自動車）やゼロハンカー（50cc）で競い合うイベントが民間主体で 2010 年から開催されてきました。

一時は来年の開催が危ぶまれたこともありましたが、市も運営に参画することで、2020 年の第 11 回大会から日程を 2 日間に増やして開催されるようになりました。

～ 将来の「ものづくり」を担う学生たちの背中を押したい ～

「全日本ＥＶ＆ゼロハンカーレースｉｎ府中」は、もともと 2010 年に民間の有志の方々が実行委員会を立ち上げ、草の根的に行われてきた大会です。

今では、全国の工業高校や工業科の学生を中心に毎年 40 チーム（例年 160 名以上）ほどが参加し、地元メディアにも取り上げられるほどに大きなものに成長しました。

2010 年からの 10 年間は、参加者に「レースの場を提供すること」を第一目標に、開催側の負担を可能な限り減らすことで、いわば細く長く続けてきました。

毎年参加される高校生のメンバーは入れ替わりつつも、その年齢は変わりませんが、一方で実行委員会メンバーについては、高齢化が進んできました。レース会場は、数レースごとに人力による整地が必要で、終了後

には機械での整地も必要になるため、人員的にも大きな負担がかかります。
　また、資金面では参加者からの参加費だけでは開催費用を賄えきれないことから、さまざまな企業にご協力のお願いをしてまわっていたそうです。
　こういった負担や将来の大会の行く末を考えたとき、「大会規模を大きくするのは難しいから、ちょうど 10 回目である 2019 年まではこのままで頑張ろう。それをもって終了としよう」というのが実行委員会の考えだったのです。

　そして、2018 年に実行委員会からは負担増を理由として、第 10 回をもって大会を打ち切りたいというアナウンスが参加者に行われました。
　すると、参加を続けてこられた団体から「継続してほしい」という願いが市に多く寄せられました。
　もともと「この大会は開催すること自体に意義がある」、「参加者が自作のビークルを走らせることに意義がある」と考えていたこともあったそうです。
　しかし、「レース中にドライバーのミスやマシンの不調などで十分な走りができなかったとき、ドライバーが仲間たちの前で号泣する姿もたくさん見てきた」と当時の実行委員長は語っていました。
　そんな中で終了の知らせがあり、参加者たちの様子を見て、改めてこれは単なる「ものづくり」の披露の場ではなく、参加チームのドライバーは自分たちの学校や仲間の想いを背負って本気で走っている「スポーツ」なんだという原点に立ち返らされました。
　そこで、大会に対する参加者の熱意と、せっかく 10 年間も行われてきたこの大会を、府中市としても支援するため、第 11 回大会から府中市も参画して開催することとなりました。

～　「ものづくりのまち」で行わる唯一無二の大会をより良いものに　～

　この大会は、参加者にとって普段の「ものづくり」活動の貴重な発表・表現の場にもなっています。しかし、どうしても実行委員会の負担を考慮して開催されるため、1 日で予選から本戦レースまで行うというハードスケジュールになっていました。

過去を否定するわけでは一切ありませんが、これでは遠方から参加したにもかかわらず予選敗退したチームにとってはその場が十分とはいえません。また、観覧者にとっては、場内に順位やタイムを掲示する設備など何の表示もなかったため、レースの進行がわかりづらい上に、レース以外の楽しみがないといった状況がありました。そこで、レース参加者はもちろん、観覧者の方にも、楽しんでいただくため、2 日間の開催に変えたり、参加者の走行機会を増やしたり、様々な工夫を凝らしました。

～ 広島県府中市で「ものづくり」の今と将来を支える大会に ～

「全日本ＥＶ＆ゼロハンカーレースｉｎ府中」は、「ものづくりの精神」「チャレンジ精神」「チームワーク精神」が問われる大会です。

「ものづくり」は、アイデアを頭で考え、そのアイデアを図面にトレースするところから始まります。そして、「ものづくり」は、その過程で材料の色・音・匂い・質感などを感じることができます。また、「ものづくり」は、五感を刺激するクリエイティブな創作活動です。

その結果、「ものづくり」はすべての工程から感動を得ることができ、生み出したものがまた、さらなる感動を生み出すことにつながります。

しかし、現代の「ものづくり」は分業化され、そのプロセス全体を感じられる機会は少なくなっています。そんな中、この大会は単なるレースではなく、車体・エンジンを自作し、感動を生み出すという「ものづくり」の精神から成り立っています。

そして、参加者の多くが「ものづくり」の将来を担う若者であり、先輩である社会人チームと交流できる大切な機会が創出されています。

この大会が、ここ「ものづくり」のまち府中市で過去 10 年に渡って開催され、今後も末永く続けて開催できることで、「ものづくり」の精神の伝承、ひいては府中市の「ものづくり」のまちとしての将来を支えていく象徴になればと願っています。